Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

044

幼児の言語獲得に関する一研究

西野美佐子
(東北福祉大学)

子供の語彙発達についての研究は従来水平発達の側面から論じられる事が多く，垂直発達を問題とした研究はきわめて少い。ところで子供が学習することばには，指示対象に対する名前(普通名詞)があり，それには個々の物に与えられる名前とクラスに対する名前とがある。それらの名前は普通，特殊から一般に至る幾つかの水準に分けられ階層的体系を構成している。本研究は，どの水準の名前が最初に子供に獲得されるのか，とくに自然概念語をとりあげて幼児のカテゴリーラベルの獲得順序について実験的に検討を試みた。

予備実験Ⅰ，(目的) 自然概念語の中で特に子供に親密だと考えられる植物，花，動物，鳥，魚，けもの，昆虫，硬貨，お金，乗物，自動車，犬，食物，野菜の合計14カテゴリーについて成人がどのような語を自由に連想しうるかを明らかにする為に実施。(方法) 被験者は大学生男女各30名計60名で，カテゴリー名を言い自由に想起した名前を記述させた。(結果) 想起された単語の総数は1154語であり，総頻数は7562であった。

この結果と他の論文を参考にして動物(人-11，けもの-17，鳥-8，魚-13，昆虫-10)食物-24，植物-26，乗物-15，お金-11，の合計135の対象の写真をとり刺激を作成した。

予備実験Ⅱ，(目的) 本研究は言語の獲得順序の中でも垂直発達を問題とするものであるから，刺激が内部構造を基にして一致している事が前提となる。そこでここでは刺激選択の基礎資料を得る為に上記8系列に含まれる124の刺激に対して中心性に従って5点尺度で成人男女各5名計10名の評定を得る事を目的として企画した。お金系列は評定の対象から除いた。

その結果得られた平均評定値を参考にして，5系列(植物，食物，動物，お金，乗物)について上位，中位，下位のそれぞれの水準につき各々4刺激 計60枚の刺激写真を選択した。表1参照

本実験，(材料) 5系列の水準毎に各々4枚の刺激写真を白ボール紙(20×27.5cm)に貼った刺激カードを計15枚作成し用いる。(被験者) 年齢2，3，4才の男女各5名，5才の男女各10名計50名の幼児とそれと対照する為の成人男女各10名計20名である。(方法) 刺激カードを呈示し4刺激写真の個々の名前と4枚全部を合わせた内容をまとめの名称について質問し，個別名とカテゴリーラベルの獲得の有無について調べた。系列及び系列内水準の順序は被験者毎にランダムとした。

表1 中心性の評価

刺激	平均値	刺激	平均値	刺激	平均値
シェパード1	4.4	犬 シェパード1	4.4	動物 シェパード1	4.4
〃 2	4.3	コリー	4.5	ねこ	4.1
〃 3	3.7	柴犬	5.0	ぞう	4.6
〃 4	3.7	ゴールドドッグ	4.0	リス	4.0
平均	4.03	平均	4.48	平均	4.28
チューリップ1	4.1	花 チューリップ1	4.1	植物 チューリップ1	4.1
〃 2	2.8	グラジオラス	3.9	ケヤ	3.7
〃 3	3.9	コスモス	3.7	梅	3.5
〃 4	3.5	カンナ	3.5	さぼてん	3.9
平均	3.58	平均	3.8	平均	3.8
シビック1	4.1	自動車 シビック1	4.1	乗物 シビック1	4.1
〃 2	3.9	ジープ	4.1	自転車	4.1
〃 3	3.8	トラック	4.4	船	3.9
〃 4	4.7	バス	4.2	飛行機	4.5
平均	4.13	平均	4.2	平均	4.15
にんじん1	4.1	野菜 にんじん1	4.1	食物 にんじん1	4.1
〃 2	3.9	きゅうり	4.4	ビスケット	4.3
〃 3	3.9	さつまいも	3.5	ぶどう	4.4
〃 4	4.0	ほうれん草	4.8	ケーキ	4.1
平均	3.98	平均	4.2	平均	4.23

(結果) ① 個別名とカテゴリーラベルについての平均正答率は年齢の上昇と共に増加している。水準別カテゴリー名の正答率の順序は，各系列により異るが子供の場合その正答率に差がみられ，獲得順序性のある事を示唆する。② 成人は個々の名前に対してより分化した特殊な名称を与えるのに対して，子供は一般的な名称を与えやすい。成人は同一刺激が異る水準にある時はそれに応じた異る名称を与える。これは同一刺激が幾つもの異る水準に同時に属しうる事を成人は習得している事を示す。子供はこの年齢ではまだ十分その事を理解していないように思われる。③ 幼児の場合，カテゴリーラベルが出てくるのは稀であり，又出てきたとしても誤りが多い。年齢でみると，2才児では殆んど出ず，3,4才児でようやく出始め，5才児になるとまとめの名称らしきものが出てくる。カテゴリーラベルの下での統合が始まるのは3才代からと考えられる。しかし，成人のそれと一致するのは一般に就学後と考えてよかろう。④ 成人が最も多く示したカテゴリーラベル(A.M.W)と子供のそれとの一致率を調べ，高いもの程早く

NII-Electronic Library Service

Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

表2. 個別名とカテゴリーラベル正答率(単位%)

系列	年齢	下位 個別名	下位 カテゴリー名	中位 個別名	中位 カテゴリー名	上位 個別名	上位 カテゴリー名
食物	2才	50	40	55	0	52.5	0
	3,4才	75	45	62.5	0	85	5
	5才	85	40	78.7	20	90	35
	成人	97.5	90	100	100	100	100
植物	2才	30	20	12.5	20	5	0
	3.4才	75	55	20	55	18.8	0
	5才	91.3	50	15	95	32.5	0
	成人	97.5	95	62.5	100	97.5	100
乗物	2才	10	0	57.5	20	90	0
	3,4才	10	0	48.8	45	90	0
	5才	25	20	65	65	97.5	30
	成人	86.3	85	100	100	100	100
お金	2才	30	10	10	0	10	40
	3,4才	25	20	21.3	0	13.8	55
	5才	82.5	15	82.5	0	55	90
	成人	100	100	100	80	100	100
動物	2才	0	0	10	40	75	0
	3,4才	0	0	13.8	45	93.8	35
	5才	0	0	10	85	98.8	85
	成人	85	85	81.3	100	100	100

表3. 子供と成人の最頻カテゴリー名

AMW	%A	%C	CMW	%A	%C
にんじん	90	42	にんじん	90	42
野菜	100	6	食物	0	16
食物	100	16	ぶどう	0	18
チューリップ	95	46	チューリップ	95	46
花	100	64	花	100	64
植物	100	0	花	0	54
シビック	85	8	自動車(るま)	15	60
自動車	100	48	自動車	100	48
乗物	100	16	乗物	100	16
10円	100	16	お金	0	66
硬貨	80	0	お金	0	66
お金	100	66	お金	100	66
シェパード	85	0	犬	10	78
犬	100	60	犬	100	60
動物	100	48	動物	100	48

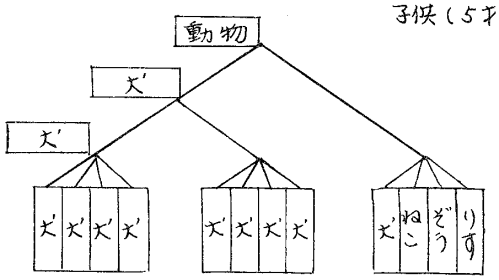
AMW = adult modal word
CMW = child modal word
%A = 大人の比率
%C = 子供の比率
F(I.M) = 頻度 岩淵・村石「幼児の用語」に基づくもの

表4 獲得順序

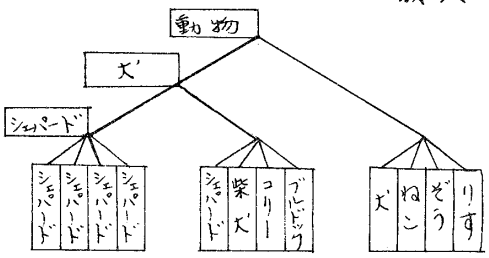
AMW	F(I.M)	順序	%C	級内	級間	一致率
たべもの	0	↓ 2	16			%
やさい	18	↓ 3	6	28	19	68
にんじん	19	← 1	42			
植物	0	↑ 3	0			
花	158	← 1	64	36	32	89
チューリップ	11	↓ 2	46			
のりもの	0	↑ 2	16			
自動車	150	← 1	48	25	20	80
シビック	0	↓ 3	8			
お金	64	← 1	66			
硬貨	0	↑ 3	0	37	33	89
十円	29	2	16			
動物	12	↑ 2	48			
犬	42	← 1	60	36	30	83
シェパード	0	↓ 3	0			

図1 子供と成人の最頻個別名とカテゴリー名

子供(5才)



成人



獲得されるものと考え各系列内における獲得順序を決めた。子供の行為が，これらの獲得順序と一致するかどうか調べた所，高い一致率が示され，ほとんどの子供が指定獲得順序に従う事が証明された。従って，従来の概念形成で言われていた一般から特殊へとか，その逆の特殊から一般へといった一方向の発達理論では説明できない。語彙の発達は R. Brown や J.M. Anglin 等が指摘しているように，一般性の中間の水準から獲得されそれからより一般的な方向とか，より特殊な方向へ学ぶと考えられる。⑤岩淵・村石編の「幼児の用語」から A.M.W の頻度と獲得順位との相関を調べたところ 0.6504 であった。従って，子供のことばの獲得順序を予測するものとして子供の話しことばの生起頻度がよい指針となり得る事が示された。事実，生起頻度に基く順序とことばの獲得順序とは食物系列を除いて一致していた。

結論及び問題点，

実験した系列数が少く，明確な事は言えないが，語彙の発達，特に垂直発達には順序性がある事が明らかとなった。それは特殊から一般へとか，一般から特殊への単一方向の発展ではない。むしろ子供は一般化の中間の水準でカテゴリー化する普通名詞からまず最初に学習しその後もっと特殊なことばもっと一般的なことばを学習する。語彙の発達も Werner が認知の発達で示した 分化と階層的統合の傾向によって特徴づけられると言えよう。カテゴリーラベルの獲得順序を予測すると思われるものは子供の話しことばの生起頻度である事が示された。しかし，子供がことばを獲得する順序は何によって起るのか。例えば，子供は一般に成人から対象物の名前を学ぶと考えられるが，成人はより特殊な分化した名前をつけるのに対して，子供はより一般的なあまり分化していない名前をつける傾向があるのはなぜか。又ここで示された獲得順序は，語彙発達における水平発達のどの領域のことばに対しても一般かしえるのか。又子供の獲得順序には個人差がないのか等疑問点が残るので今後の研究で明確にしてゆきたい。

注 1，a 杉村健，市川裕子「概念カテゴリー規準表－幼児の場合」奈良教育大学紀要 24-1 1975

b 岩淵悦太郎・村石昭三「幼児の用語」

NII-Electronic Library Service